

学徒勤労働員

昭

和十三年六月に文部省が「集团的勤労作業運動実施に関する通知」を發し、中学生以上の学生、生徒が農事・軍用品製造の簡易な作業に年間三日から五日間を標準として従事することが始めとされている。

全国の学生は昭和一九年の四月から翌二〇年八月の敗戦までの一年五カ月間、日本中の学徒（現在の中学生以上の生徒・学生）が、授業を放棄させられ集団で工場や農村で労働に従事した。文部省の調査では、昭和二十年三月には男子一七七七千人、女子一三二万九千人、合計三一〇万六千人にもおよび、これは当時の動員対象学徒の六九・二二%にもなっている。

日中戦争が始まった時、日本軍の総兵力は約一〇〇万人、四年後の日米開戦の時は二〇〇万人、戦線の拡大と戦死者の補充などで召集される兵士はぐんぐん増えて、ついに五〇〇万人を超えた。日米開戦に入ると船や飛行機を補充して武器・弾薬を増産する労働力を補うために目をつけられたのが学生

や生徒であった。

ちなみに富山県の工場は昭和九年は五〇〇で従業員は二万人余りで全国の一八位であった。それが戦争中の昭和一七年には一〇位になり、昭和二〇年の終戦時には軍需工場数一〇〇〇で従業員十二万人を超え、全国六位の軍需工業県となっていた。県内の労働力はあまねくあさりつくされ、県外からの挺身隊・報国隊の受け入れざるをえない状況になっていた。

金戸の学徒動員

金

戸で八十歳以上の人は、出征した家庭へ農作業の手伝いに数日間奉仕活動した経験をもっているが、軍需工場へ勤労奉仕の経験はなかった。しかし日米開戦に入った頃に尋常小学校生であった七十五歳以下の人は工場に行った経験を持っている。特に昭和十九年七月に富山県文教科内に「学徒勤労働員本部」が設置されてからは、中等学校の三年生以上は女子を含めてほとんど出動することになり、やがて低学年も動員されている経験を持つている。はじめは週二・三日であったが、十九年の終わりには連日の工場出勤となり、夜勤も行われるところもあつた。尋常小学校と言う頃は勤労

奉仕であったが、国民学校と称する頃は学徒動員と呼ぶようになった。

金

戸のは、農作業の手伝いと野村製作所（現兼松）金戸工場（現山本土石）に模型飛行機の部品作りに行った人が多かった。金戸の勤労奉仕・学徒動員の体験談は次のようであった。

「尋常小学校時は農家の畑や田んぼの手伝いをする。卒業して藤田企業へ勤めてからは出征している家族の手伝いをしたり、十人ほどで楽団を組み出征兵士を送る行事に参加し演奏しトランペットを担当した。また福井の永平寺に初めての女性として入山し、線香の落ちる音を聞くという修行した」

「尋常小学校の時は農家の畑や田んぼの手伝いをした。高校は砺波の中越木工にはいり横浜の軍需工場へ一年間行った」

「尋常小学校時は農家の畑や田んぼの手伝いをする。中学の時は金戸の野村製作所金戸工場で模型の飛行機部品作りをする。週に電気節約で会社が休みになると立野が原へ薪拾いに出かけた」

「尋常小学校は農作業の奉仕であり、国民学校となつてからは野村製作所金戸工場へ学徒動員される。敵

をごまかすための模型飛行機づくりをする」

「金戸墓場横に報国農場なるものがあり、学徒動員の昼食の材料の野菜をつくる。工場内で二時間ほど勉強したあと工場の仕事をする。担当の代用教員も共に工場へ出勤し生徒を指導するのであった。足なかの草履通学であった」

「高商へ通っていたが、ほとんどが近くの軍需工場日曹へ学徒動員であった」

「田尻へ炭俵を担ぎに行ったり、出征兵士の家へ稲刈りの手伝いに行ったり。また城端航空（現西川繊維）へ行ったことがある」

勤労奉仕・学徒動員の体験談は、当年七十五歳から八十五歳までの人達だが、現在の小学高学年から中学生が金戸の工場へ働きに行っていた。

戦没者

金

戸の戦没者は出征兵士数の割には左記のように少ない。明治の徴兵制が敷かれて約七十名ほど兵役に就いたことが確認されている中で九名（内二名病死）が戦死している。他の地区と比較しても少なく幸運な地区と云える。南方での玉砕にあった人もな

く、またインパール作戦や長沙作戦に参加した人もいたが幸いに帰還しているのだ。

日露戦役

陸歩補源元伊蔵 明 38 3 7 桃家屯
陸歩一北山義雄 昭 16 7 25 本籍地

（日支事変戦後病死）

太平洋戦争

陸伍 高桑慶輝 昭 17 4 30 河北省
陸長 中仙道政夫 19 2 17 太平洋上
陸長 森井外二 19 7 27 ビルマ
陸上 盛田正吉 20 4 8 満州
陸長 宮塚豊治 20 5 10 沖縄
東頭時光 20 6 10
陸上 東頭幸一郎 20 7 17 比島
太平洋戦争の戦死者日付をみると七名中六名までが昭和十九・二十年に集中している。
城端全体では日清日露戦争で五五名、太平洋戦争では三八一名が戦死している。

協議録

金

戸には昭和九年度からの協議録が残っている。終戦までの村人の戦争に対しての取り組みが記されて貴重なものである。最初に戦争に関しての記録は、昭和十三年三月十の初総会に「勅語奉読」とあり、総会の始めに勅語を参加者が奉読したようだ。次

に出征軍人に対する慰問袋贈呈方二関スル件について協議があり、「一袋送料共一円八拾銭トシテ入租品等ハ委員ニ一任ノコト」とある。また国防献金納方ニ関スル件が「参拾五円献納スルコト」とある。そして出征軍人遺家族手伝方ニ関スル件が取り上げられたが「次回に熟議スルコト」とある。同じ月に二度臨時総会を開き出征軍人家族手伝いに関する事を協議している。昭和十四年の初寄合では、先ず皇居遙拝並黙禱とある。「出征遺家族手伝ニ関スル件」や「出征軍人ノ慰問ノ件」等については終戦まで「例年通り行フコト」と慣例化している。昭和二十年の初寄合には出征人員二十二名とある。これらの議題は終戦まで続けられている。

